広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	杜甫の旅、芭蕉の旅
Author(s)	劉, 小偉
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 21期 : 50 - 59
Issue Date	2007-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038827
Right	
Relation	

杜甫の旅、芭蕉の旅

劉小偉（リュウ・ショウイ）

１．はじめに

周知のように、松尾芭蕉（１６４４〜１６９４）と杜甫（７１２〜７７０）はそれぞれの国の詩歌史における代わることのできない天才的な人物である。杜甫は律詩の完成者とされ、「詩聖」と呼ばれる一方、芭蕉は俳諧に高い文芸性を賦与し、「俳聖」と呼ばれている。芭蕉は杜甫を非常に崇拝していて、人間的にも芸術的にも杜甫に学んでいたことがよく知られている。

二人の人生を眺めてみると、類似点は非常に多いと言えよう。

「杜甫も芭蕉も、ともに漂泊の旅をつづけて居り、その間、多くの不朽の作を残したことや、安住の地を求めて、人に寄食したり、寄贈を受けて過ごしたことや、はたまた、その自然を熱愛する詩人としての性格などを考へてみると、不思議なほど類似点をもっている。」(『杜甫の浣花草堂と桃青の芭蕉庵』吉田貞一)

その中で、旅はいずれの人生においても重要な位置を占めたのである。二十歳から歴遊し始めた杜甫は、人生の終わりまでに定着しようとしたが、一ヵ所に長く定着できず、放浪の人生を送った。芭蕉は四十一歳から五十一歳で亡くなるまでの十年間、日本各地を廻り、たくさんのすばらしい作品を残している。二人を「旅の詩人」と呼んでもいいであろう。

しかし、二人の生きた時代は九百年もずれており、日本と中国の社会もずいぶん違っていて、二人の性格や人生の目標なども違っていたので、どんなに似通っているとは言え、そこには様々な差異が見られる。本レポートでは杜甫と芭蕉の旅を比較・対照することによって、その共通する部分及び相違点を明らかにするとともに、その背景にある社会状況をも考察していきたいと思う。

２．旅の出発点―時代背景

２．１　杜甫

杜甫はちょうど唐の玄宗が即位した年に生まれた。彼の祖父杜審言は初唐の宮廷詩人であった。唐の一番栄えた時代「開元の治」に少年時代を過ごした杜甫は儒学の教育をしっかりと受けた。しかし、科挙に合格できなかった彼は、長安で憂苦を味わっているうちに安禄山の乱に遭った。霊武で即位した粛宗の元に向かう途中で賊軍に捕まり、長安に連行され、そこで何年間も幽閉された。幽閉されている間に『月夜』や

『春望』等の名作を作ったのである。

ようやく長安から脱出した杜甫はまた粛宗の元に駆けつけた。朝廷はその忠誠心に報い、左拾遺の職を授けたが、左拾遺就任の直後、宰相房琯を弁護する上奏を行ったので、粛宗の怒りに触れ、翌年、華州の司功参軍の職に左遷させられることになった。それで杜甫はその後の人生を放浪のうちに過ごすことになった。

杜甫の一生の中で定着して生活した期間は非常に短い。北は河北省、南は湖南省、東は江蘇、浙江、西は甘粛、四川まで、ほぼ全国に足跡を残している。古来から中国の文人には、「万巻の書を読み、万里を旅する」という伝統的な考え方があるが、杜甫の場合は、就職活動がうまく行かず、やむを得ず旅を始めたのである。

彼の人生にとって一番の転換点と言えるのは安禄山の乱に遭ったことであろう。四十四歳の時、杜甫は右衛率府兵曹という微官の職を得た。初めて官職を得た杜甫は、奉先県の親戚に預けた家族を迎えに行くが、ちょうどその時安禄山の乱が起きた。皇帝の所へ駆けつけた彼は反乱軍に長安で幽閉され、その後も官職を得たが、長く続かず、放浪の一生を送った。

杜甫は本心から旅をしたのではなく、それはむしろ当時の社会情勢と深い関係がある。戦乱の中で人が思いのまま行動できるのはごく稀なことである。

２．２　芭蕉

対照的に、芭蕉の生きていた時代は定着できる時代であった。

芭蕉は父親の代に、藤堂家によって経営され始めた城下町上野に移住していた。上野で生まれ育った彼は藤堂良精の子良忠の近習となり、後に上野の天満宮に奉納し、その春、江戸に下った。江戸では俳諧宗匠として活動したが、やがて、深川の芭蕉庵に移った。その間各地を旅して多くの名句と紀行文を残し、難波の旅舎に没した。

芭蕉の時代は幕藩体制確立の時期とほぼ重なっていた。兵農分離、商農分離、家臣団の城下町への集住など、既に乱世が終わり体制確立期に入った時代と言える。

芭蕉の人生の転換点と言えば、三十七歳の冬に深川の草庵に入居したことである。江戸で有名な俳諧宗匠として活動していた彼は、その地位を捨て、贅沢な生活から脱出しようとし、隠者の生活を選んだ。むしろ自ら俳諧の世界を楽しめる生活を選んだのである。

芭蕉の行動は「時代との関係でいえば、より恣意的・より偶然的であるようにみえなくもない」(『芭蕉―その時代』廣末保)。確かに、芭蕉は安定した生活を捨てて、自らそれを「精神の方法としてだけでなく生活の方法として」（同上）選んだ。

３．内因と外因

二章でも述べたように、杜甫と芭蕉が旅に出かけたのにはそれぞれの理由がある。しかも、その理由は明らかに異なっている。

３．１　芭蕉

福田秀一は『連歌師の旅と芭蕉の旅』で芭蕉の旅の動機・目的を次のようにまとめている。

「芭蕉の場合は、ほとんどすべて彼自身が旅を求めて旅に出た、すなわち内因的であった、ということであろう。」

外部から求められたのではなく、自ら旅の生活を選んだことが芭蕉の旅の特徴である。芭蕉の旅の初めは深川入庵と言える。その前の芭蕉は有名な俳諧宗匠として活躍し、贅沢な生活を送ることができたが、純粋な芸術を追求するために俳諧宗匠の世界から脱出したのである。

「要するにこの時（『野ざらし紀行』の時）の芭蕉が、亡母墓参というような世俗的、日常的な目的よりも「風狂の旅」というような、旅そのものを目的とする態度。言いかえれば芸術至上主義的な立場の方を、より強く持っていたことを確認すれば足りる。」（同上）

四大旅行と名づける他の三つについては、次のような記述がある。

「事情は大差ないが、名所旧跡を訪ね、歌枕や古人の後を慕い、大自然に浸るとともに歴史の悠久にも心を潜めるという態度が、目的意識として芭蕉の心の中に次第に強くなっているのを感じることができる。」（同上）

内因としては、堕落的な俳諧世界から脱出しようとすることだけではなく、古人への思慕もその大きな原因となっている。

『奥の細道』の冒頭にこう書いてある：

> 月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人なり。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老をむかふる者は、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず……

ここでの古人は杜甫や李白、西行などを指していると見られる。これらの古人は芭蕉の憧れた人々で、彼らのように人生を旅で過ごす、旅で終わるのは芭蕉の夢でもある。あまりに憧れたので、自らの一切を捨てて、旅に出かけるのも無理からぬことであろう。

３．２　杜甫

杜甫作『乾元中（けんげんちゅう）　同谷県（どうこくけん）に寓居（ぐうきょ）し作れる歌（其の一）』に、次のような一節がある。

中原　書無くして帰り得ず

手脚は凍皴して　皮肉は死す

嗚呼一歌す　歌已に哀し

悲風我が為に天より来たる

故郷の中原から書がなく、帰れないので、悲しい風も私のために天から来たのだ。

どうして中原へ帰れないのだろう。戦乱はその原因の一つであるが、戦乱が終わった後、官職に就いた杜甫は宰相房琯の弁護のために左遷された。そんな身で貧乏な生活を送った杜甫はふるさとへ帰りたくても帰ることができず、旅をしたのである。すなわち、杜甫の旅は外因に大きな原因がある。

杜甫のそういう思いをもっと明白に表しているのは次の『絶句（其の二)』である。

江碧にして　鳥逾白く

山青くして　花然えんと欲す

今春　看すみす又過ぐ

何れの日か　是れ帰年ならん

今年の春は見ているうちにまた過ぎてゆく、いつ帰れるかまだわからない。その旅の万やむを得なさを描いているのである。

一見して同じように世俗を離れて旅をする人であるが、芭蕉の俗世脱出に対して、杜甫はどうしても世の中を捨てられず、どこへ行っても中原の人々を心配し、『茅屋（ぼうおく）　秋風（しゅうふう）の破（やぶ）る所（ところ）と為（な）るの歌（うた)』のような素晴らしい作品を残した。

４．旅の一休み所――草堂（草庵）

あまり心の休まることのなかった杜甫の一生において比較的安住の地となったのは、成都郊外の浣花草堂であった。それはちょうど芭蕉の芭蕉庵時代に酷似したものである。いわば、二人とも一度世を離れ、隠者のような生活を送ったのである。それでは、

二人の草堂（草庵）生活は一体どうであったのだろうか、それらはどこが違ったのだろうか。

４．１　成都草堂

成都草堂に定着する直前、杜甫は人生のどん底にあった。その忠誠が報われて、左拾遺に就任したものの、宰相房琯を弁護したために華州の司功参軍の職に左遷されたのである。それもおそらく対人関係が原因で一年ほどで辞職し，またさすらいの生活に戻った。

杜甫は華州の司功参軍の職を捨て、家族を連れ、関中（長安一帯）を離れた後、秦州、同谷（ともに甘粛省東南部）を経て蜀に入り、成都郊外の浣花草堂に居を定め、比較的落ち着いた生活を送った。

そんな杜甫にとって，静かで風景の美しい成都草堂は心のいやされる場所であり、自分の不遇や社会の状況を考えるのにも十分な時間が与えられたのだろう。

杜甫は草堂に住んでいる間に何をしていたのだろう。

成都は当時蜀の中心ではあったが，杜甫が初めて着いた時（乾元二年＜７５９＞１２月）は、荒寥たる冬景色だった。故郷の中原からも離れていたし，杜甫はさぞ寂しかったであろう。しかし、最後に思い直し、次のような詩句を作った。

自古有羈旅、　　古より羈旅あり、
我何苦衷傷。　　我何をか苦しんで衷傷せむ。

昔から長く他郷にいることがあるなら，私はそんなに悲しい必要はないだろう。

成都草堂の近くに浣花溪或は百花潭と呼ばれる川が流れている。「林塘の幽」を好む杜甫はここで農作業をしたり、友と遊んだりして、しばらく安定した生活を送った。しかし、やはり貧乏な生活で，憂国憂民の心も強いから、杜甫は日々の生活への不満から天下、国家を思い、優れた作品を書いた。それは『茅屋（ぼうおく）　秋風（しゅうふう）の破（やぶ）る所（ところ）と為（な）るの歌（うた）』になるものである。

安（いずく）にか広厦千万間（こうかせんまんげん）を得（え）て

大（おお）いに天下（てんか）の寒士（かんし）を庇（おお）いて俱（とも）に顔（かんばせ）を歓（よろこ）ばしめ

風雨（ふうう）にも動（うご）かず　安（やす）きこと山（やま）の如（ごと）くならん

嗚呼（ああ）　何（いず）れの時（とき）か眼前（がんぜん）に突兀（とつこつ）として此（こ）の屋（おく）を見（み）れば

吾が廬のみ独り破れて凍死を受くるも亦た足れり

秋の暴風で詩人の住む家の茅葺き屋根が飛ばされてしまったことで作った歌である。詩人の貧困さがよく表現されているが、最後に「天下の貧しい人は住む所があれば自分は凍死でもいい」と述べて、詩人の思考は我が身の出来事から離れ、天下の貧乏人の救援方法に転じたのである。詩人が国の為・民の為に心を砕いていることが明らかになった。

成都城外には蜀相孔明の祠もある。劉備の三顧に報い二代にわたり孔明が忠誠を尽くした史実に感激して,『蜀相』という作品を残した。

丞相の祠堂　何れの処にか尋ねん

錦官城外、柏森森

階に映ずる碧草　自から春色

葉を隔つる黄鸝　空しく好音

三顧頻繁なり　天下の計

両朝開済す　老臣の心

出師　未だ捷たざるに身先ず死し

長く英雄をして　涙襟に満たしむ

最後の一句は今日もなお名句と言われているものである。国のために力を尽くそうとした英雄は、世を去る時にどんなに悲しかったことであろうか。恐らく杜甫は古人の境遇を借りて自らの身の上を悲しんでいるのであろう。

４．２　芭蕉庵

深川入庵は芭蕉の人生において最大の転換点とも言える。

それについて、芭蕉自身は次のように語っている。

「ここのとせの春秋、市中に住詫て、居を深川のほとりに移す。長安は名利の地、空手にして金なきものは行路難しと云いけむ人のかしこく覚へ侍るは、この身のとぼしき故にや。

しばの戸にちやをこの葉かくあらし哉」

入庵する前の芭蕉の職業は俳諧宗匠であった。当時の江戸は遊興の地で、俳諧宗匠という職業をしていた人たちは奢侈的消費をしていた。

「点料あるいはその点料を背後から支えている経済的富有は、かくのごとく点者のプライドと芸術の純粋性を奪ってしまった。芭蕉が消費のもたらす擬制の秩序に批判の眼をむけ、談林俳諧の世界をかけ抜けて深川泊船堂に入庵するようになったのは、おそらくこのような事情によるのだろう。」「市中に住み詫びた彼が名利、すなわち名誉（権力・声望）と利益（経済力）に縁がなかったからだという。」(『永遠の旅人』堀信夫)」

芭蕉が奢侈の生活から脱出し、貧乏な生活を選んだのは、芸術への追求が根本にあったからであろう。入庵前の芭蕉はただ一人の有名な俳諧宗匠にすぎなかったが、入庵後の芭蕉は純粋に芸術を追求する者になり、自分の人生においても俳諧の世界においても更に高い階段に登った。

芭蕉が深川の庵でしたことは、主に貧乏な生活を味わい、隠者への道を模索することであった。

芭蕉が草庵で作った作品の一つに、次の句がある。

「芭蕉野分して盥に雨を聞く夜かな」

それは杜甫の『茅屋（ぼうおく）　秋風（しゅうふう）の破（やぶ）る所（ところ）と為（な）るの歌（うた）』に基づいたものであると言われている。しかし、杜甫が「茅屋（ぼうおく）　秋風（しゅうふう）の破（やぶ）る所（ところ）と為（な）る」から天下の貧しい人を思って苦しんでいるのに対し、芭蕉の「盥に雨を聞く」というのはむしろその雨音を楽しんでいるのだろう。貧困な生活を味わうとともに、古人への思慕は芭蕉に隠者への道を模索させたのである。

５．まとめ

杜甫と芭蕉の比較研究を主な目的とし、二人の人生における最大の事件―旅―を題材として、いろいろな資料を調べることによって、二人をもっと深く理解するようになった。確かに二人は尊敬すべき人物である。

５．１　類似点

前述したように、「杜甫も芭蕉も、ともに漂泊の旅をつづけて居り、その間、多くの不朽の作を残したことや、安住の地を求めて、人に寄食したり、寄贈を受けて過ごしたことや、はたまた、その自然を熱愛する詩人としての性格などを考へてみると、不思議なほど類似点をもっている」が、二人の類似点は技術的に高い文学作品を作ったことだけではなく、それぞれの国の人々の心に深い影響をもたらしたことである。

二人の一番似ているところは心の純粋さである。二人が自ら己の道を選んだことはすばらしいことである。

杜甫が中国詩歌史において高い位置を与えられたのは、彼がどんなに苦しい境遇にあっても、忠君愛国、人々の苦しみを忘れなかったことに大きな原因がある。彼は漂泊の生活の中で、故郷の中原を思いつつ、『春望』『茅屋　秋風の破る所と為るの歌』など不朽の名作を残した。ひたすら仕官への道を追い求めたことは嘆かわしいことであるが、その心の純粋さは感動に値するものであろう。

芭蕉の場合は、自らが旅の生活を選んだのだが、そこにはやはり当時の俳諧世界の堕落振りに原因があるだろう。俗世から脱出し、隠者への道を選んだのは、古人の隠遁生活に憧れたとはいえ、その芸術に対する執着心と現実世界が相容れなかったことがその根本の原因だろう。「そういう（漢詩人的隠者の）ポーズを取らざるを得ない、悲痛な失意と内心の抵抗があったことを見るべきである。」との記述もある（『芭蕉評伝』井本農一）。

旅という俗世脱出によってしか純粋な芸術を追求する志を表すことができなかったことは、ある意味致し方のなかったことであろう。

５．２　相違点

二人の人生や作品は似ているところが多いし、芭蕉の杜甫への思慕はよく知られているにもかかわらず、二人の追い求めたこと、人生の目的には大きなずれがある。それは中国と日本の考え方や社会状況にも関わっている。

まず、杜甫の政治への根気強い追求に対して、芭蕉は芸術への追求に力を尽くした。

杜甫を代表とする中国の詩人については、佐藤保『中国古典詩学』の中で次のように述べられている。「中国の詩人にとって詩と政治とは切り離せないものであった。かれらは善政を喜び、悪政を悲しみ憤って詩を作り、詩によって政治のあり方を論じるのを詩人の役目と考えた。すなわち「儒家の詩観」がそれである。一見、政治とは無関係に見える田園自然をうたう作品でも、ほとんどその背後に詩人の政治の世界からの疎外感や逃避の思いがこめられている点を考えれば、これらの作品もまた政治と深くかかわっているということができる。」

杜甫は政治的事件を題材にする時事詩の代表的な詩人であり、彼の作品は「詩史」と呼ばれている。一生政治に関わりたいという気持ちは作品の中にも反映されている。

芭蕉は純粋な芸術を追求するために、毅然と奢侈的な生活を捨て、旅人の生活を選んだ。彼は世俗から引退し、全てを芸術に捧げて生きたとも言える。「通俗的宗匠生活の断念は、暖かい家庭や安楽な生活を諦めることである。……それはある意味では失意である。……しかし、失意の中から、自分の本来求めていたものをはっきり自覚して行くという意味では、意を得たことでもある。……世俗からの引退という意味では消極的隠者だが、世俗から引退した自分を、芸術へ献身するという意味では、消極的隠者ではなく、積極的に生きることである。……一種の芸術至上主義である。」という記述もある（『芭蕉評伝』井本農一）。

政治からの影響が比較的少なかった日本の文人が、心身を芸術に捧げることができたことは幸いなことであった。

そして、貧しい生活を嘆きながら、不遇な一生を送った杜甫に対して、芭蕉は貧困な生活を楽しみながら、気ままに人生を送った。

科挙に合格できず、官職を得ても人間関係などの原因ですぐにやめざるを得なかった杜甫は戦乱に遭い、家族と長い間離れ離れになり、一生さすらいの生活を続けた。そんな杜甫は律詩の完成者として中国詩歌史に大きな貢献をしたが、その価値は彼の死後何十年も経ってからやっと認められるようになった。

「憂愁の詩人」と呼ばれている杜甫は生活の困窮のため、妻子を親戚の家に預けたこともあった。出世できず、友達や親戚に寄食したり、それを苦しんでいたことは杜甫の送った人生の本当の姿である。

一方、芸術のために思いきって漂泊の生活をし、貧しいと言っても衣食の心配がなかった芭蕉は生きている間至る所に弟子がいた。彼は一種の隠者のポーズを取っていたが、実はそういう清貧で静かな生活を楽しんでいたのである。

旅で人生を過ごした二人は、追い求めていたものが違っていたので、彼らの「生きる意味」というものも違っていたのかもしれない。しかしながら、彼らが旅の中で示した生き様は、現代を生きる我々にも数多くの示唆を与えてくれている。それは、その高い文学性だけに起因するものではなく、彼らが時代に翻弄されながらも純粋に生きたからではないだろうか。

参考文献

井本農一（1967）「芭蕉評伝」『校本芭蕉全集』第九巻、pp.9－130、角川書店

斎藤勇　（1955）『杜甫』東京研究社
佐藤保　（1997）『中国古典詩学』大蔵省印刷局
廣末保　（1982）「芭蕉―その時代」『芭蕉講座』第一巻、pp.1―22、有精堂
福田秀一（1970）「連歌師の旅と芭蕉の旅」『芭蕉の本６』、pp.58―88、角川書店
堀信夫　（1970）「永遠の旅人」『芭蕉の本６』、pp.337―369、角川書店
山口真樹（1995）『憂愁の詩人　杜甫』学習研究社
吉田貞一（1999）「杜甫の浣花草堂と桃青の芭蕉庵」『芭蕉研究論稿集成』第四巻、pp. 70－79、クレス出版